



はじめに

1.1 大学で求められる「学士力・人間力」とは

本講義の中心的な話題であり、大学で求められる、またみなさんに身に付けて欲しい力「学士力・人間力」とは以下のようなものです。

自力で課題を発見し、適切な資料・方法を駆使して、
自分なりの考えをまとめて答えを導き出せる力

これは、高校までの基本的な学習である、教科書や問題集に載っている問題に解答するといったこととは大きく異なります。高校までの学習では、与えられた問題をいかに効率よく解き、正解を導くかが重視されてきました。これに対して、大学での学習では、問題さえも与えられない場合があります。そのときは、自分で適切な問いを発見するところから始めなくてはなりません。解き方もいくつかの例が示されることはありますが、基本的に解法の手引きや解答・解説といったものは存在しません。それどころか、答えが一つに定まらない場合や、誰でも理解できるような答えが存在しない場合さえ無数にあります。例えば、次のような問いにあなたはどうか答えますか（ちょっとだけ真面目に考えてみてください）。

[問い]

人間は何のために生きるのか

何をどのように答えて良いのか悩みますよね。しかしながら、実はこのような難解な問いに対しても答えを導き出すことは可能です。その方法は、まず条件を付け（読んだ書物によれば）、目的を示し（満足する人生を送るために）、客観的なデータを踏まえ（例えば、多くの人がそうしてきたように）、論理的に（みなで協力しなるとなし得ないことだから）持論を展開するといったものです。これらの前提を、論を述べるときの「分析の観点」（または「論述の観点」と言います。例えばこの観点に立てば、「人間は何のために生きるのか」に次のように解答することもできそうです。

[解答]

様々な書物によれば、満足する人生を送るためには、多くの人がそうしてきたように、自分だけのことを考えず、みなで幸せになれるように社会に貢献できる生き方を選ぶべきである。なぜならば、社会全体が幸福になるためにはみんなの意識改革と協力が必要で、みなさんの幸福が一人一人の幸福であるのであれば、我々はこれを目指して生きていくべきだからである。

仮に、上記のように難解な問いに答えることができたとしても、それがみなさんに受け入れ



てもらえるかはまた別の問題です。読み手・聞き手が納得できる答えを示すためには、次の三つの点に注意する必要があります。

一つ目、重要なことは適切な調査・論証の手続きを踏まえていることです。後で詳細に述べますが、「私は思う」とか「そうでないはずがない」とかいった書き手の判断を示すだけでは、まったく論証に必要な手続きを踏んでいることにはなりません。

二つ目、最終的に辿り着いた答えが、妥当（確率が高く）で、かつ穏当（普通にあり得ること）なものであると、読み手・聞き手を説得しやすくなります。すなわち共感を呼びやすいということです。ただし妥当な答えは必須条件ですが、穏当な答えはかならずしもそうではありません。自分なりに熟考し、論理的に考え、辿り着いた答えが極端なものであったとしても、妥当なものであれば、答えとして採用される場合もあります。穏当な答えであることはあくまで受け入れられやすいという程度のものです。

三つ目、そしてもっとも大切なことは、「論理的説明力」です。簡単に言うと、なぜそのような答えに辿り着いたかを、理屈を立てて明解に説明できることです。この説明力には、「論理的思考力」(1.3.1)と「論理的表現力」(5.2)が含まれます。前者は論理的な思考の流れを、後者はそれを適切に分かりやすく（ある意味形式的に）表現する力を指しています。この二つの力に関しては、後に取り上げて詳述します。

少し長くなりますが、このような力は高校までにみなさんが学んできたことになぞらえて言うのであれば、「難解な数学の問題の正解を得ることそのものではなく、その解答を得るための解法について、適切な方法であるか、またその他の方法はないか、もっと簡単な方法はないかということに考えを巡らせ、さらにそもそもこの問題を考えることに意味があるのかといったことを、公正に評価すること」ということになります。これが我々が大学で学んでいく中で身に付け磨き続けていかなければならない「学士力・人間力」の基礎なのです。

1.2 課題について

1.2.1 問いを発見する力・その重要性

自力で「問い」を発見する力を「問題発見力」と言います。後でも述べるように大学ではこの問題発見力（と解決する力）を特に重視して教育を行っています。高校までの学習と異なり、大学では教員の言ったことやテキストに書いてあることを無批判に鵜呑みにしてはいけません。「こう書いてあるが、本当だろうか」と常に疑ってみる姿勢を要求されることになります。ちょっとした引っかかりや不明瞭な点を見逃してはなりません。それが問題発見へ繋がる第一歩であるからです。この問題発見力は社会に出ても必要になる力です。よく耳にする「与えられた仕事をこなすだけの人間」はダメだという箴言と強く関連付けられます。その意味で問題発見力は一生を通じて重要なスキルと位置づけることができます。

問題発見力はある種の直感・洞察力に支えられています。この力が未熟な者がいくら考



えても有効な問いを得ることは困難です。(思い出してみてください。高校の国語や社会の授業で先生が何か質問はありませんかと問われたとき、先生をうならせる質問ができたことがあったでしょうか)。

ですが、自分には無理だと諦めてしまうのはいささか早計に過ぎるといえます。なぜならこのような力は、みなさんが生まれ持った能力ではなく、これまでの経験やこれからの学修によって磨き上げられていく力だからです。もしあなたが問題発見力に自信がないと思っているのであれば、これからの大学生活でたくさんの経験を積むとともに、知識を学んでいけばいいだけのことです。もちろん大学生活を終えて社会に出ても継続的に学習して経験を積み、自らの問題発見力を磨き続けていかなければならないことも忘れてはなりません。

1.2.2 魅力的な課題とは

魅力的な課題の判断の基準として次の三つの点を上げておきます。

一つ目、「はっきりとは分からないこと」が課題になり得るということです。まずは自分がよく知らないことで見当を付け、辞書を調べてみたり、インターネット等で検索してみたりするのも良いでしょう。また図書館の情報検索等を利用するのも有効です。ここで言うはっきりとは分からないこととは、おそらく当たり前すぎて疑問にも思わなかったり、有効なデータが簡単に見つけられなかったりすることを指します。

例えば、昼の挨拶はなぜ「こんにちわ」ではなく「こんにちは」と書くのが正しいかとか、「女性の方がたくさんの言葉を知っている」という直感本当に正しいかとか、一見些細でつまらない疑問であっても、本当に知りたいと思うのであれば十分に魅力的な課題となり得る可能性があります。実は課題探しそのものも意味のある学習です。課題探しを通じて、世の中のことは、あらゆることが正確には明らかにされていないということにも気付いて欲しいのです。

二つ目、「面白いと思うこと」も課題になり得ます。これがもっとも重要なことで、面白いと思えない課題の調査・研究は長続きしないし、中身を深めることはできません。面白いと思うこととは、別な見方をすれば、その課題の解決に、資料を調べたり、アンケート調査をしたりと一定の労力を払えることでもあります。何が面白いことなのかは実に多様です。一見個々人によっても大きく異なっているように思われます。しかしながら、友人とよく話し合ってみると意外に何を面白いと思うかには一定の共通性があることに気付くはずで、それがどのような共通点を持つのかを話し合ってみることも自体も魅力的な課題と言えます。

三つ目、魅力的な課題は「知的好奇心を喚起すること」でなければなりません。知的好奇心とは何でしょうか。まず、それが公共的で普遍的な問いであることです。例えば「日本人はどのくらいリンゴが好きか」という課題は立てられますが、「友だちの山田さんはどのくらいリンゴが好きか」という課題はほぼ価値がありません。多くの読み手・聞き手はあなたの友人の山田さんの嗜好には興味がないからです。すなわち得られた答えがある

程度の一般性（対象が日本人や中学生といった大きなものであること）を持つこと、予測性（その結果から何かの予測を得られること）を持つことが課題にとって、とても重要なのです。またその解決に主観的ではなく、客観的で論理的な説明が必要となる問いである必要もあります。ちょっと自分だけで考えてみてすぐ答えが分かってしまうような問いは、公共的で普遍的な問いとは言えません。

このような点をすべて満たした問いをここでは探求すべき魅力的な「課題」と定義しておきます。魅力的な課題と向き合う時間を過ごすことは、気の合う仲間とファミレスで長い時間おしゃべりをして盛り上がる楽しさとは根本的に異なるはずです。真に魅力的な課題は、時間をかけて真摯に課題と向き合い、それを丁寧に解き明かしていく価値のあるものなのです。

1.3 学士力・人間力基礎で養うべき力

1.3.1 論理的思考力（ロジカル・シンキング：logical thinking）

1.1 で取り上げたような論理的思考を展開するためには、次の二つの点が重要となるので挙げておきます。

一つ目、1.1 でも指摘した「分析の観点」について説明します。持論を展開する場合には、かならず前提となる観点を定めておく必要があります。再度整理しておく、条件、目的、客観的なデータ、論理性を揃えて論を展開していくことが必要です。ここで言う論理性とは、「普通に考えていくと、ほぼ間違いなくそうなる」という流れのことです。それを一般化したスキルが論理的思考力ということになります。

二つ目、「客観的なデータに基づく根拠」について説明します。それは論を展開するとき書き手が読み手・聞き手を迷いなく持論へ引き込んでいくための道しるべのようなものです。道を歩いていて、分岐点に来たときに右か左かのどちらに進めばよいのかを判断するための材料のようなもので、この論にとって「どうやらこちらが本当らしいぞ」と思えるような資料でなくてはなりません。例えば大きな話で言えば、「今世紀に入って地球の温暖化が進んだ」ということについては、いくつかの観測点で前世紀と今世紀の気温差を示した資料が、また、小さな話で言えば、「3年前に比べてある店の料理がまずくなった」ということについては、ある程度の人数の人にインタビューした時のデータがこれに当たります。気を付けて欲しいのが、仮に「ある店の来客数が3年前に比べて減少した」という客観的データがあったとしても、それは、根拠としては不十分です。なぜなら客の減少を「まずくなった」ことが原因だとはっきりと関連付けて良いものかどうか証拠不十分で判断に迷うからです。

1.3.2 批判的思考力（クリティカル・シンキング：critical thinking）

もう一つ、批判的思考力は学士力を考えるときに、非常に重要な意味を持っています。まず、「批判」という言葉に惑わされないようにしましょう。ここで言う批判とは、否定や非難の意味ではなく、客観的に情報を分析、判断するという意味になります。言い換え

れば、「ある命題（議論すべき内容）が正しいかどうかまず疑え」ということであり、それが正しいと考えられる理由を検討すべきであるということになります。もちろん検討した結果正しい（と考えられる）のであれば、それを受け入れることに問題はありません。具体例で考えてみましょう。「男性の方が女性よりもかなり多くアルコールを飲む」という指摘があるとします。経験的にみて、どうも確からしいように思います。しかしながら、批判的思考ではこのような確からしいこともまず疑ってみることから始める必要があります。とりあえずネットで調べてみましょう。その結果、アルコールの消費量が「近年では男女差が縮小している」ことが分かりました。以下、記事を一部引用します。

今回の研究によると、20 世紀初頭に生まれた人の間では、男性がアルコールを少しでも飲む確率は女性の 2.2 倍で、消費量が問題になる確率は 3 倍だった。また肝硬変等健康問題を引き起こす確率は 3.6 倍だった。しかし、時代が下がるにつれ男女差は縮小し、20 世紀末に生まれた男性がアルコールを少しでも飲む確率は女性のわずか 1.1 倍で、消費量が問題になる確率は 1.2 倍、健康問題を引き起こす確率は 1.3 倍だった。

（「女性のアルコール消費 男性とほぼ同じに＝豪調査（NEWS JAPAN）
<http://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-37759116> 2018-03-12 参照）

このように調べてみると意外な結果が得られることがあります。みなさんに求められている批判的思考力とは、まず「疑ってみること」から始まるのです。もちろん、上に示したネット上の記事が真実かどうかを十分に検討するために、記事のもとになった論文を探して読んだりする必要があります（メディアリテラシー）。

1.3.3 第三の観点—文系・理系という枠組みにとらわれない人材を目指す

ここまで述べてきたように、大学での学習を通じて論理的思考力、批判的思考力を身につけられるように意識的に学修を進める必要があります。

さらにそれを土台として、本節では第三の観点を提案します。それは、数理的な思考力の必要性です。数理的思考力とは、論理的な思考を土台としていて、数値や統計分析の結果に基づき、結論を導くことができる技術です。この技術は、これまでの文系の人にとっては、まるで理系の学問分野のように見えることもあります。確かに、一部数式や見慣れない数値が示されることもありますが、実際には、計算したり、データを分析したりする能力そのものではなく、その過程が正しいか、その結果がどのような意味を持つか（結論を支持しているのか）を判断できる能力のことです。このような技術が求められる新しい文系人材とは、「理系分野の研究成果を適切に評価し、現在不足している点や問題を適切に見出し、今後どのような支援が必要かを具体的に相手に伝えることができる」能力を持った人ということになります。これからは理系と文系の人々が協力してプロジェクトを進める時代になりますので、文系だからといって理系分野の研究成果を理解せず済ませることはできません。よって、先の論理的思考力、批判的思考力に加えて、このような数理的な思考力も理系はもちろん文系の学生であっても身につけるべき必須の技能ということになります（理系の人もすべてがこのような考え方を身につけているわけではありません、あなたは大丈夫ですか？）。

ここまで、主に新しい文系の学生の在り方について述べてきましたが、逆に文系人材が

期待される場面もあります。理系人材は科学技術の進歩に貢献しますが、一方で文系人材には、その進歩がどこに向かって進むべきか、我々が（個人も含め）なにを追求していくべきかを示唆することが期待されます。

大阪大学文学部長金水敏先生が次のように述べています。「文学部の学問が本領を発揮するのは、人生の岐路に立ったときではないか、と私は考えます。（中略）人間が人間として自由であるためには、直面した問題について考え抜くしかない。その考える手がかりを与えてくれるのが、文学部で学ぶさまざまな学問であったというわけです。」（2017年卒業セレモニーでの式辞からの抜粋）

このように考えるのであれば、文系・理系が互いに補完しあって、社会を発展させていくことが望ましいということになるのではないのでしょうか。ただし、本節で提案しているように、相互に相手の言っていること（互いの研究成果）を理解しあえるスキルをもっていることが必須です。そう考えると、結局、理系・文系という枠組みにとらわれることなく、広く学ぶことが重要なのですが、これから大学で学修していくにあたって、これまでの自分の学習方法を振り返り、自分の立ち位置を見極め、どのような能力を持った人材を目指すかについて考えてみるのが大切なのです。

